

「私の視点から見た多摩CB」

～世話人有賀達郎～

私はコミュニティラジオ局 FM 西東京を運営し西東京市及びその周辺のエリアで情報を集めて発信してきた。

コミュニティビジネスと聞いて同じ地域に根差している仕事という事で親近感を持って楽しんで関わってきた。

私自身がコミュニティビジネスを行ってきたわけではないのであまり語れる事はないが、私がやってきた事、見てきた事、感じてきた事を多摩CBの応援団的な視点から並べてみた。

1. 自己紹介を兼ねて

- ・ AM ラジオ局と自営業
- ・ 顔が見えないところに伝える。
- ・ 社会人としてのスタートは良い経験。
- ・ メディアとは。
- ・ 副業から
- ・ 看板、肩書がない仕事。自分個人を伝える仕事。
- ・ 時間の自由をかなり得られた。
- ・ 神戸での経験、感じた事。

<AM ラジオの仕事>

ラジオ局では16年間楽しく仕事をする事が出来、世の中の可能性を感じる事が出来た。また、ラジオを多くの人が聞いているが、必ずしも自分の周りの人たちがいつも聞いているわけではない。それでも放送局の名前は知られているし、ラジオがどんな機能を持っているかは説明する必要もないようなところで仕事をしていった。

<自営業>

阪神淡路大震災の時には、すぐに神戸に行きボランティアとして2週間近く避難所のお手伝いをしてきた。行く時に、冬山用の寝袋、ザックを貸してくれた近所の方、ホカロンやマスクなどをまとめて買ったらサービスをしてくれた薬局の方、避難所を引き上げて家を探して立ち寄ったらごちそうをしてくれた韓国人の知人、実家の手伝いに戻っていた関西出身のラジオ局の先輩がありがとうと言ってくれた事、こんな体験が出来た。

さらに、倒れかかっているビルを見て、世の中に「絶対確実なものはない」という事を感じ、それ以来これが自分の発想の中心になっていると思う。人生に大切なこんな事を得られたのは、自営業として自分で決める自由があって行けたから。

2. FM 西東京

- ・ 新しく出来るコミュニティ FM の開局準備から。
- ・ 誰も知り合いのいない街、田無へ。
- ・ コミュニティ FM とは何かを伝える。
- ・ 新しい形の会社を目指して。
- ・ 関わったすべての人が、関わって良かったと思えるように。
- ・ ゲスト出演者の宝庫。
- ・ 街で活躍している人と何のプレイヤーでもない自分。
- ・ 地元に根差している人たちがつながる可能性。

<誰も知り合いのいない街、田無へ>

1997 年の夏に応募して採用されて、知り合いもいなかった田無の街でゼロからラジオ局を立ち上げる事になり、地元のミニコミ紙などで募集したスタッフと一緒に 1998 年 1 月に放送をスタートさせた。放送の中身をどう集め続けるかが大きな課題で、始めた頃は、ゲスト番組は 2 年もするともう出演してもらおうような人はいなくなってしまふんじゃないかなと思っていた。地元の人、地元の情報なので、新聞やテレビで紹介されるなんて事はほとんどないが、少しずつ知り合った方から人のつながりで地元の情報が集まってくるようになっていき、いまではいくらでもゲストにお呼びする方がいると感じている。

リアルな人のつながりを続けて 20 年経ってみると現在、西東京（田無）の事なら誰よりも知っている人がいる、または何かを知っている人を見つけられると、まるで生まれ育った街のような気持になるくらい。

<新しい形の会社を目指して>

ラジオ局である事は誰でもわかるが、コミュニティ FM というのが自分たちの街の機能の一つなんだ、自分たちのものなんだという事がなかなか理解されない。また、誰もがいつもラジオを聞いているわけではないが、必ず聞いている人がいる。小さなステップの積み重ね。そして、関わったすべての人が関わって良かったと思えるように。社員もパートもボランティアもゲストもリスナーもスポンサーも…。そのために、会社として最終決断と責任はトップが取るが、上から指示が降りてきながら動くような組織ではなく、お互いがこの街をより良くしていこうという共通

の想いを持って対等に自分の考えを出せるようなフラットな仕組みにしたかったが、私の力不足で出来なかった。大きな課題を残したまま現在は局の運営から離れたところから見ただけになっている。

3. 多摩 CB

- ・ スタートは亜細亜大学のシンポジウムに参加から。
- ・ いつの間にか世話人に。
- ・ 世話人って？
- ・ 拡大世話人会（合宿）
- ・ 人のつながりがすごくなっていく。
- ・ 分科会
- ・ RESAS
- ・ 「チーム 24 分ですむまち」が表彰された

<スタートは亜細亜大学>

世話人の長島氏に誘われて、何があるのかよくわからないまま亜細亜大学のシンポジウムに参加して、コミュニティ FM の役割のような話をした。それぞれのゲストスピーカーの話に刺激を受けて面白い事に出会えたと感激、シンポジウムの一部を後日 FM 西東京で放送をした。初めてコミュニティビジネスの人たちに触れて驚いたのは、シンポジウムの交流会で私と名刺交換をしたいという方が列になってしまった事。コミュニティビジネスの方たちのパワーに驚いたと同時にコミュニティ FM をちょっと評価していただけたかなとうれしかった。

<「チーム 24 分ですむまち」が表彰された>

RESAS（地域経済分析システム）を勉強しよう、活用しようという動きが始まり、多摩 CB ではかなり早い時点から説明会などの取り組みを始めた。西東京市でこれは面白いと感じたメンバーが数人集まったので、西東京でも RESAS の勉強会、ワークショップなどを開催して市の職員も含めて幅広い市民が集まった。内閣府で RESAS を担当しているトップの方が西東京市のコール田無に来てわかりやすく熱い解説までしてくれた。

その流れの中で内閣府が RESAS を使った政策提案を公募しているとの事で、西東京市内の会社経営者、NPO 理事、主婦、大企業サラリーマン、地域ビジネス支援者、FM 西東京というメンバー 8 人が集まった。西東京市を盛り上げようという企画をまとめて提案をしたら全国の最終 10 組に選ばれて最終プレゼンテーションを地方創生大臣も参加している前で行って賞をいただいた。しかし、あくまでも企画提

案なので実際に西東京市で採用される事はなかった。さらに 2018 年の企画提案にもチームの一員が応募して地方予選を通過した。

4. PlanT

- ・ ほとんど行った事がない日野、やった事のないコーディネーター。
- ・ 自分で気が付かない事に気付いて後押しをしてくれる人。

<行った事がない、やった事がない>

FM 西東京を定年退職した後に何をやるか決めていなかった。その時に声を掛けていただいたのが日野市産業連携センターPlanT のコーディネーター職募集。PlanT は出来た当初に一度見学をした事があってなかなかきれいで素敵な場所だとは思っていた。しかし、中央線豊田駅に降りたのはその時くらいで日野市の事はよくわからないし、コーディネーターという仕事をやった事もないので躊躇していたら、募集を教えてくれた方が「有賀さんに合うと思うよ。」という一言をくれて決断して応募、そして採用された。

これは多摩 CB での人のつながりによるもので、おかげさまでまた面白い日々を過ごす事が出来ている。

5. J:COM

- ・ FM 西東京と多摩 CB の仕事から。
- ・ テレビの仕事なんてやった事がない。
- ・ たまろくと（西東京・小平・東久留米・東村山・清瀬）で活躍している方をゲストに迎えて対談。
- ・ どの街にも素敵な方がいる。
- ・ ベッドタウンかもしれないが、面白い人がたくさんいる街。
- ・ 大きなメディアが取り上げなくても、ここにいる人の数だけ人生がある。

<テレビの仕事なんてやった事がない>

こちら FM 西東京の退職が決まった時に声をかけていただいたのだが、テレビの対談なんてやった事もなく出来るかどうかはわからず、すぐにはやると返事が出来なかった。その後、声を掛けてくれた方がやれるよと後押しをしてくれたのでやってみる事になりすでに 2 年半、130 人以上の方と対談をしてきた。

自分では出来る出来ないが判断出来ない事でも、他の方から見ると違って見えるようで、周りの方の意見の大切さを感じている。

<どこの街にも素敵な方がいる>

どこにも素敵な方はいるがその人を知る機会がないので、この街は魅力がないというように住んでいる人にも見えてしまう。地元根差したメディアがあると大きなメディアには出てこないけど素敵な取り組みをしている方たちに登場いただき、素晴らしい方がいる素敵な街だという事を知ってもらえる。コミュニティビジネスにたずさわっている方々にもどんどん出演していただきたい。どこの街にも放送局があって欲しい。

6. コミュニティ FM とコミュニティビジネス

- ・ 顔が見えるビジネス。
- ・ 共通のキーワードは地元。
- ・ 自分たちの街。
- ・ 自立、自主。
- ・ すべては自分から。
- ・ ボランティアと一緒に作っていく。自分の意志で参加、自分の責任。
- ・ ボランティアも同じ。ボランティアの方が責任感を持てるのではないか。
- ・ コミュニティビジネスはビジネスだからお金を考えるのは当たり前。
- ・ お金を稼ぐ前に、社会への想いがある。

<ボランティア>

FM 西東京の場合は、開局の頃よりは少なくなったがボランティアスタッフがいろいろな形で参加している。その想いはお金に換算出来ないもので一緒にラジオ局を作っている一員。ボランティアだとちゃんとしていない、仕事を任せられないというような声を聞くが、お金をもらったらちゃんとするのだったら世の中とつくにもっと住みやすくなっている。

ボランティアの方は、お金以前に自分自身の想い、意欲があって、それを活かす場として自らの意思で選んで仕事をしているのだと思う。放送以外でも FM 西東京をボランティアで支えてくれている方々がいらっしゃるのが心強い。

一方コミュニティビジネスは社会の課題を解決するために始める事が多いが、行政など他のところからのお金を頼りにしてボランティア活動をしていくのではな

く、自主的に自分たちが稼いで運営していく。もちろん行政との協力関係があっても良いがそこに頼らない。

顔の見える地元でのビジネスという部分でもっとコミュニティFMとコミュニティビジネスが連携出来ると思う。FM西東京では、放送以外でも地元の人とのつながりを大切にして、毎月のように会合を開いたり、年に1~2回程度交流会（ロコラボ）を開催してきた。

こうしたコミュニティFMの存在そのものが人を結びつけるきっかけになる。多くの顔の见えない人を対象にしているマスメディアではないし、報道機関でもなく様々な方たちと一緒に作っていくもの。

<共通のキーワードは地元>

ビジネス以前に、日常生活を送っている時に地元をどこまで感じているのか。選択肢がたくさん持てる時には地元こだわらなくてもいろいろな生き方がある。住んでいる地元と離れたところに通勤したり、遊びや買い物に出掛けたり。そのためのバックアップ体制も利用出来、豊かな生き方を求めていける。

ただ、地元の仕事があつて通勤に時間や労力を費やさなくても良いと生活時間は大きく変化する。また、現在出来ている買い物や趣味のための移動が年齢とともに自由にならなくなってくると、地元でのバックアップも必要になってくる。そのあたりも考えると、早い時点から地元で何が出来るかという事を探し、見つけていく事が重要になってくる。その一つのヒントはコミュニティビジネス。そして情報や人とのつながりをコミュニティFMから得られるようになると良いと思う。

7. シンポジウムからの気づき

- ・ 毎回意欲ある新しい方たちとの出会い。
- ・ 開催大学の先生からの講評は様々。
- ・ 前向きの行政の姿勢など、自分の知らない世界を知る事が出来る。
- ・ 開催場所によっては、他のコミュニティFMの力をお借りできた。
- ・ FM西東京のパーソナリティがシンポジウム分科会で事例発表。
- ・ ゲストの話にはビジネスのヒント、人生のヒントが転がっている。
- ・ ブースを設定して様々な団体が自己PRを出来るようになった。
- ・ 開催大学の学生さんが多摩エリアのコミュニティビジネスについて調査発表してくれるのがありがたい。

<開催大学の先生からの講評はさまざま>

名刺交換の列に驚いた 2010 年の亜細亜大学のシンポジウムから毎年シンポジウムの運営に関わってきたが、いつも新しい出会いがあって自分の世界が広がっている。また、開催大学の先生に最後に講評をしていただく事が多いが、時にはコミュニティビジネスについて辛口のコメントが出てくることもあったが最近は概ね良い評価となっている。

私は辛口コメントはコミュニティビジネスの事をよくわかっていないからだと思います、また一般の方が感じている事の反映だろうと思う。より知っていただくための努力を我々がしていく事が大切だと思う。最近が良い評価をしていただく事が多いので、コミュニティビジネス特に多摩エリアでのコミュニティビジネスが拡がり、知られ伸びているからかと思う。

8. あれこれ

- ・ 世話人のパワー。
- ・ 事務局の努力。
- ・ Facebook の役割。
- ・ ワールドカフェなど。
- ・ 正しい答えはない。
- ・ こんな生き方。トレッキング人生。
- ・ PlanT の日野市は面白い。
- ・ たまろくとはもっと面白くなる。

<トレッキング人生>

何か目標に向かって登っていく山登り的な生き方というよりも、いろいろなところを歩いていくトレッキングのような生き方を実践出来ている。流れに乗っていく川流線的な生き方とも言える。これは震災の現場を見て絶対に確かだというものは無いという事を感じた事が大きいと思う。

その後、多くの人に出会いその方たちの生き方考え方に触れ、応援してくれるいろいろな方々の存在があったからこそ出来ている。また、それは地域という枠があって考えるから成り立つ事が多いかなと思う。

<世話人のパワー、事務局の努力>

毎年、世話人会でシンポジウムの内容を決めていくのだが、それぞれ思いが強い方々が揃っているので会議はいつも熱を帯びて長くなる。また熱くなって、お互いの意見を聞かずに自分の意見を通そうとするような状態にまでなり結論がまとまらない事もある。そんな世話人会の状況をまとめてシンポジウムを実行していくの

は、通常業務以外にボランティアで事務局業務をしているスタッフのみなさんの存在が大きい。もちろん世話人は無給。

9. 締め

- ・ キーワードは地域。
- ・ ○○愛というより、○○を面白いがる、楽しむ。
- ・ 見逃していたね・・・。
- ・ どこにでも可能性がある。

<○○愛というより、○○を面白いがる、楽しむ>

この街をより良くしていこうという共通の気持ちがあれば、多少の意見の違いはどうにかなる。様々な意見を持つ人がいるという事を認め、違いがあるから面白いんだと思えると良いのだと思う。地域の事を考えるのに、○○愛という事が良く出てくるが、愛というと盲目的というイメージが付いてくるので、私は○○愛というよりも○○を楽しむ、面白いがるというくらいが良いかなと思っている。

そして、大きく目立つ事だけではなく、目立たないけど良いものに目を向けて、お互いが楽しく生きていける方法のひとつがコミュニティビジネスなんだろうと思っている。

<以上、未完のまま>